ウズベク語における過去の出来事を指し示す三つの動詞屈折接尾辞の文法カテゴリー

日髙　晋介
（国立国語研究所）

The Grammatical Categories of Uzbek Verbal Inflectional Suffixes Referring to Past Events[1]

HIDAKA, Shinsuke
National Institute for Japanese Language and Linguistics

Based on general cross-linguistic definitions of tense, aspect, and evidentiality (modality), this study examines how these grammatical categories are expressed in Uzbek based on the descriptions in an Uzbek reference grammar (Kononov 1960) and in terms of evidentiality (Johanson 2003). This study focuses in particular on the verbal suffixes *-di*, *-gan* and *-(i)b*, which Straughn (2011) describes mainly in terms of "confirmability." This paper analyzes *-di*, *-gan*, and *-(i)b* in terms of tense, aspect, and modality (evidentiality), showing that *-di*, in terms of tense-aspect, simply represents a situation as having occurred in the past, while in terms of evidentiality, it does not necessarily indicate direct experience. Therefore, *-di* exclusively indicates past (i.e., it is purely a tense marker). Conversely, in tense-aspect, *-gan* represents the present perfect tense, while in evidentiality, it does not necessarily represent indirect experience. Therefore, *-gan* mainly indicates present perfect (i.e., expressing both tense and aspect). Finally, *-(i)b* does not have a specific tense-aspectual meaning, and can indicate both indirect evidence and a mirative sense. Thus, *-(i)b* indicates evidentiality (modality).

キーワード：ウズベク語，過去，証拠性，間接性

Keywords: Uzbek, past, evidentiality, indirectivity

1. はじめに
2. 文法カテゴリーとしてのテンス・アスペクト・モダリティ
3. 先行研究による*-di*, *-gan*, *-(i)b*の記述
4. 各形式が表す文法カテゴリー
5. おわりに

[1] 本稿は、2名の査読者から頂いた有益なコメントのおかげで、構成・内容・表現において、改善することができた。ここに記してお礼申し上げたい。もちろん、残された不備はすべて筆者による責任である。

1. はじめに*

本稿では，ウズベク語において，過去の出来事を指し示す動詞屈折接尾辞 *-di, -gan, -(i)b* がどのような文法カテゴリーを表すのかについて議論する。Kononov (1960: 215-222) では，この三つの接辞が「過去時制」を表すものとして挙げられている。(1)～(3) に，*kel-*「来る」が用いられた具体例を挙げる。

(1) *U odam* ***kel-di-ø.***
that person come-DI-3
「あの人は来た」(ハルナザロフ 2010: 348)

(2) *U odam* *allaqachon* ***kel-gan=ø.***
that person already come-GAN=3
「あの人はもう来ている」(ハルナザロフ 2010: 348)

(3) *(lye,) Tanaka* ***kel-ib=di.***
INTR NAME come-IB=3
「(あっ，) 田中さんが来た。」(ハルナザロフ 2010: 349)

これらの接辞は，動詞語幹に付き，そのあとに主語の数・人称と一致する接辞あるいは接語が続く。

Johanson (2003) と Straughn (2011) では，証拠性の観点から，これら三つの接尾辞を取り上げている。Johanson (2003) は，チュルク諸語における過去の出来事を指し示す動詞屈折形式を概観する中で，ウズベク語の*-di, -gan, -(i)b* についても言及している。ただし，それぞれの文法カテゴリーについて詳細に言及しているわけではない。他方，Straughn (2011) は，カザフ語とウズベク語の証拠性について取り扱っている。Straughn (2011: 61-76) は，*-di* と *-gan* が同じ事態に用いられうることを指摘し，様々な比較を試みている。しかし，*-(i)b* と他の二形式それぞれに関しては特に比較は行われていない。なお，上記に挙げた先行研究による記述の詳細については，3 節を参照されたい。

そこで，本稿では，これらをテンス・アスペクト・モダリティ (証拠性) の観点から記述し，それらの形式が表す文法カテゴリーについて議論する。その議論を通じて，*-di* は過去 (テンス) を，*-gan* は現在パーフェクト (テンス・アスペクト) を，*-(i)b* は証拠性 (モダリティ) をそれぞれ表すと結論付ける。

日高晋介. 2022.「ウズベク語における過去の出来事を指し示す三つの動詞屈折接尾辞の文法カテゴリー」. 『チュルク語文法の諸相—音韻・形態統語・意味—』. pp.47–63.
* 本研究（の一部）はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相—音韻・形態統語・意味の統合的研究—」の支援を受けています。

用例中の日本語訳・グロス・太字・下線は，ことわりのない限り，筆者によるものである。なお，用例中の *-di*, *-gan*, *-(i)b* を含む動詞に太字を付し，*-di* には DI, *-gan* には GAN，*-(i)b* には IB というグロスをそれぞれ振っておく。

2. 文法カテゴリーとしてのテンス・アスペクト・モダリティ

本節では，本稿の議論の前提として，文法カテゴリーとしての通言語的なテンス・アスペクト・モダリティの定義を参照し，文法カテゴリーをどのように取り扱うか示す。

まず，テンスの定義として，Comrie (1985) を取り上げる。Comrie (1985) では，"The basis of the discussion in the body of this book is that tense is grammaticalised expression of location in time." (Comrie 1985: 9) とされており，テンスを「時間的位置の文法化表現」であると定義している。

アスペクトの定義として，Comrie (1976) を取り上げる。Comrie (1976) では，"As the general definition of aspect, we may take the formulation that 'aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation'." (Comrie 1976: 3) とされており，アスペクトを「状況の内的時間構成を捉える様々な方法」であると定義している。

Palmer (2001) において "Modality is concerned with the status of the proposition that describes the event." (Palmer 2001: 1) とされており，モダリティは「事象を記述する命題の位置づけに関わる」と述べている。証拠性について，Palmer (2001) は，話し手の命題に対する認識的態度を表す命題的モダリティの下位範疇として，認識的モダリティと証拠性モダリティを認めている。

> The essential difference between these two types is (as is implicit in the discussion) that with epistemic modality speakers express their judgments about the factual status of the proposition, whereas with evidential modality they indicate the evidence they have for its factual status.
>
> (Palmer 2001: 8)

次に，本稿で文法カテゴリーをどのように取り扱うか示す。本稿では，Comrie (1985: 19) の方針に従う。

> However, it is acknowledged that a given grammatical category may have more than one meaning (it is thus logically possible that the auxiliary *will* in English might have both temporal and modal meanings); that a grammatical category may have a basic meaning and a number of peripheral meanings or uses (where these are not predictable from the interaction of basic meaning and context); and that the basic meaning of a lexical item may be definable in terms of a prototype, i.e. in terms of

the most characteristic instance, rather than in terms of necessary-and-sufficient conditions.

(Comrie 1985: 19)

つまり，本稿では，下記三点の方針に従って，文法カテゴリーを取り扱う。

① 一つの文法カテゴリーは二つ以上の意味を持ちうる。
② 一つの文法カテゴリーは基本的意味を一つと，いくつかの（基本的意味と文脈との相互作用では予測できない）周辺的意味や用法を持ちうる。
③ 文法カテゴリーの基本的意味は必要十分条件ではなく，プロトタイプ，つまり，もっとも特徴的な例という意味で定義しうる。

3. 先行研究による*-di, -gan, -(i)b*の記述

本節では，ウズベク語の文法書である Kononov (1960)，チュルク諸語における証拠性を論じている Johanson (2003) と，カザフ語とウズベク語の証拠性を論じている Straughn (2011) を取り上げる。

3.1. ウズベク語に関する記述— Kononov (1960)

Kononov (1960: 215-222) は，ウズベク語の「過去時制」(Прошедшее время) を表すものとして，*-di, -gan, -(i)b* の三つを挙げ，それぞれ形式の見出しを，定過去時制 (Прошедшее категорическое время), 過去パーフェクティブ時制 (Прошедшее перфективное время), 過去主観時制 (Прошедшее субъективное время) としている。

Kononov (1960: 216) は，*-di* は，(文脈に応じて) 単一あるいは多数の動作を表し，その動作には疑いがないことを表す，と述べ，(4) を挙げている。

(4) *Qo'rg'on* *ham* ***yon-di-ø,*** *ombor* *ham* ***yon-di-ø,*** *og'ilxona*
farm also fire-DI-3 warehouse also fire-DI-3 barn

ham ***yon-di-ø.***
also fire-DI-3
「農場も燃えた，倉庫も燃えた，納屋も燃えた。」(Kononov 1960: 216)

Kononov (1960: 216) の記述から解釈すれば，発話者は (4) で表されている事態を（目撃などの手段により）確実に起こったものとして認識していると考えられる。

他方，*-gan* には，相対用法 (относительное употребление) と，直接用法 (прямое употребление) がある，と述べている (Kononov 1960: 218)。相対用法には，結果状態を表す場合 (5) と，動作主の経験を表す場合 (6) があるという。

(5) *Siz-lar* *ham shu echki* *to'g'risida*[2] ***kel-gan=mi=siz?***
2PL-PL also that goat about come-GAN=Q=2PL
「あなた方もそのヤギに関して来ているんですか。」(Kononov 1960: 218)

Kononov (1960: 218) によれば，(5) では，*siz-lar*「あなた方」が発話時にその場所にいることも表すという。

(6) *Ulug'* *Vatan* *urush-i-da* *qatnash-di-ngiz ...* *Siz* *qayer-da*
great homeland war-3.POSS-LOC take.part.in-DI-2PL 2PL where-LOC

jang ***qil-ma-gan=siz?*** *O'ho'*, *Brest-ni,* *Varshava-ni* *ozod* *qil-ish-da*
battle do-NEG-GAN=2PL INTR Brest-ACC Warsaw-ACC free do-VN-LOC

qatnash-gan=siz, ...
take.part.in-GAN=2PL
「あなたは大祖国戦争に参加した。…あなたはどこで戦わなかったんですか。おお，あなたは，ブレストを，ワルシャワを解放する時に参加した，…」(Kononov 1960: 218)

二文目の *Siz qayer-da* ***jang qil-ma-gan=siz?***「あなたはどこで戦わなかったんですか。」は，Kononov (1960: 218) によるロシア語訳 (Где вы [только] не сражались?「あなたは (いったい) どこで戦わなかったんですか。」) から修辞疑問文であると判断できる。つまり，このウズベク語の文は「あなたは様々な場所で戦ったんですね」，つまり「経験」を表していると解釈できる。

次に，*-gan* のもう一つの用法である，直接用法について述べる。Kononov (1960: 218) は (7) を挙げている。

(7) *Demak* *erkak-lar hamma* *narsa* *to'g'risida* *o'yla-b,* *bir*
that.is man-PL all thing about think-CVB.SEQ one

fikr-ga ***kelish-gan=ø;*** *dada-si* *kel-ib,* *un-ga*
thought-DAT agree-GAN=3 father-3.POSS come-CVB.SEQ 3SG-DAT

so'zla-gan=ø.
talk-GAN=3

[2] *to'g'risida* < *to'g'ri-si-da* [frontage-3.POSS-LOC]

「つまり，男たちは全てのものについて考え，一つの考えに合意した；父が来て，(彼らは) 彼に話した。」(Kononov 1960: 218)

Kononov (1960: 218) では，話者が，自身の経験からではなく，他の動作から，または他の要因で知った事実を表すと述べている。

最後に，*-(i)b* について述べる。Kononov (1960: 221) は，*-(i)b* が次の 4 つの意味を表すと述べている: 1) 目の当たりにしている状況から事態を結論づける，2) その場における推論を通して事態について言及する，3) その事態の正当性について疑う，4) 歴史的事実として事態を挙げる。これらの説明の後に，下記の例 ((8) ~ (11)) を挙げている。

(8) *Dov yigit* ***bo'l-ib*** ***qol-ib=san=ku!***[3]
brave young be-CVB.SEQ remain-IB=2SG=EMPH
「あんたは勇敢な若者になったなあ！」(Kononov 1960: 221)

(9) *"Qo'rg'on-ga qayer-dan o't* ***ket-ib=di?"*** — *"Sham-dan*
farm-DAT where-ABL fire leave-IB=3 candle-ABL

tuta-sh-ib ***ket-ib=di***[4], *sham-dan."*
smoke-RECP-CVB.SEQ leave-IB=3 candle-ABL
「『農場のどこから火が出たのか』『ろうそくから煙が出てきたようだ，ろうそくから』」
(Kononov 1960: 221)

(10) ***Xato*** ***qil-ib=man;*** *sen olov ekan=san, bo'lakcha yigit*
mistake do-IB=1SG 2SG fire COP.ID=2SG another young

ekan=san.
COP.ID=2SG
「私は間違ったようだ；きみは火のようだ，きみは他の若者のようだ」
(Kononov 1960: 221)

(11) *Soat-im* ***to'xta-b*** ***qol-ib=di?*** *Nega* ***to'xta-b=di,***
watch-1SG.POSS stop-CVB.SEQ remain-IB=3 why stop-IB=3

---

[3] Ibrahim (1995: 177) によれば，*V-(i)b qol-* は，*V*による動作の結果が強調される場合に用いられる，という。
[4] Ibrahim (1995: 177) によれば，*V-(i)b ket-* は，*V*による動作の方向が，話者とは反対に向かうあるいは話者から離れることを表す，という。

buz-il-ib=di?
break-PASS-IB=3
「私の時計は止まってしまったのか？何故止まったんだ，壊れたのか？」
(Kononov 1960: 221)

(8) は「1) 目の当たりにしている状況から事態を結論づける」ことを表し，(9) と (10) は，「2) その場における推論を通して事態について言及する」ことを表し，(11) は「3) その事態の正当性について疑う」ことに相当すると考えられる。ただし，「4) 歴史的事実として事態を挙げる」に該当する例は挙げられていない。

Kononov (1960: 215-222) では，「過去時制」を表す接尾辞として，これら 3 点が挙げられているが，上記 Kononov (1960) の記述を参照する限り，特に *-gan* と *-(i)b* は，文法カテゴリーとしてのテンスの中の「過去」を指しているとは言いがたい。例えば，*-gan* の相対用法である，(5) と (6) は，発話時現在との関わりがある。*-(i)b* では，そもそも過去の事態に言及せずに，「目の当たりにしている状況から事態を結論付ける」用法 (8)がある。

3.2. 証拠性による分析— Johanson (2003) とStraughn (2011)

本節では，Johanson (2003) と Straughn (2011) を概観する。

Johanson (2003) は，チュルク諸語の証拠性について論じている研究である。Johanson (2003: 274) は，チュルク諸語における，証拠性カテゴリーとしての「間接性」[5]について論じている。そして，「間接性」が表す意味の中心は，“R becomes (became, etc.) or is (was, etc.) aware of E^{n}[6]”「知覚者が，述べられた事態が表す状態になる (状態になった) あるいは述べられた事態に気づく (気づいた)」ということである，と述べている。

続いて，動詞の屈折形態素が表わす証拠性が三項体系である言語について述べている。チュルク諸語の中では，南東グループに属する新ウイグル語とウズベク語，北西グループに属するカザフ語，南西グループに属するトルクメン語がこの三項体系を持つ，つまり最も幅広い証拠性の体系を示すとし，これらの言語では，

---

[5] Aikhenvald (2003: 3) は，証拠性を表す体系には，大きく分けて次の二つのタイプがある，と述べている: (I) 情報源を特定することなしに，証拠を述べるための情報源の存在を述べる体系，(II) 情報源の種類を特定する体系。さらに，Aikhenvald (2003: 3) は，同じ論集に所収されているJohanson (2003) の記述を参照しながら，次のように述べている: タイプ (I) の言語では，証拠性の標示を受ける事態は，‘by reference to its reception by a conscious subject’「意識ある主体による受容への参照によって」(Johanson 2003: 274) 特徴づけられる。言い換えれば，不特定である情報源の存在は，その情報が仲介者を通して，「間接的に」得られるということを前提としている。この種の証拠性は，「間接性」(Johanson 2000, 2003) と呼ばれる。

Johanson (2003: 284) は、-IBDIR などが mirativity の読みを表すことについても言及している。ただし、Johanson (2003: 284) は、mirativity の読みは「間接性」の概念から自然に導かれると述べ、mirativity が中心的な意味であり、そこから他の用途が導き出されるというDeLancey (1997) の主張を退けている。このJohansonによる主張は、証拠性 (間接経験) とmirativity の近接性を主張しているLazard (1999) と相通ずる。

[6] R = recipient, E^{n} = narrated event

直接過去 -DI, 終結 (postterminal) -GAN, 間接過去 -IBDIR[7]という三つの形態素を持つ，と述べている (Johanson 2003: 278-280)。なお，Johanson (2003: 277) は，「終結 (postterminal)」について次のように説明している: "The postterminal perspective implies that, at a given aspectual vantage point, the decisive limit of the event is already passed over, ..."「終結視点は，あるアスペクト的な観点において，事態の決定的な限界がすでに過ぎ去っていることを示す。」これに加えて，「トルコ語 *-mIş* (筆者注: 上述の-GAN に相当) のようにチュルク諸語における間接過去を表す標識の機能は，間接終結視点から派生している」と述べている。この記述から，-GAN は間接過去を二次的に表すと判断できる。

ただし，Johanson (2003) は，新ウイグル語・ウズベク語・カザフ語・トルクメン語それぞれの言語において，-DI, -GAN, -IBDIR がどのような文法カテゴリーを指すのか，という問題については議論していない。

Straughn (2011) は，カザフ語とウズベク語における証拠性について論じている。なお，これ以降，ウズベク語についての記述のみ取り上げる。

その 3 章の中 (pp.61-82) で，*-di, -gan, -(i)b* それぞれが，どのような観点で対立しているのかについて，詳細に論じている。Straughn (2011: 61-77) は，確認性 (confirmativity) という観点から，*-di, -gan, -(i)b* に違いがあるとする。確認性とは，話者が過去に起こった事態を「確認」したものかどうかという概念である。Straughn (2011: 61-77) によれば，*-di* は [+Confirmative] として標示され，他方，*-gan* は確認性に関しては無標であり[8], *-(i)b* は [− Confirmative] として標示される[9]という。

さらに，Straughn (2011: 82) は，確認性に，定性 (definiteness)，距離 (distance) を加えて，下記の表 1 のように，*-di, -gan, -(i)b* の対立を示している。なお，具体的な例は，4 節で挙げる。Straughn (2011) では，これらの形式の使い分けには，確認性が最も有効であることが主張されている。

表1 *-di, -gan, -(i)b*の対立

-di Past	*-gan* Perfect	*-(i)b* Converb Past
[+ Confirmative]	[Ø Confirmative]	[− Confirmative]
[+ Definite]	[− Definite]	[Ø Definite]
[− Distant]	[+ Distant]	[Ø Distant]

(Straughn 2011: 82をもとに作成)

[7] この形態素は本稿で扱う *-(i)b* に相当する。Johanson (2003: 287) は，-IBDIRの起源は*-(I)b tur-ur* [CVB stand-AOR] であると述べている。ただし，Johanson (2003) は，どの言語がこの形式を持つのかについては述べていない。

[8] *-gan*は，話者が「確認」できる事態にも，そうでない事態にも，用いられることから，確認性に関しては無標であると考えられる。話者が「確認」できる事態を表している例は，(15) のb. を参照されたい。一方，話者が「確認」できない事態を表している例は，(17) を参照されたい。

[9] Straughn (2011: 78) によれば，[− Confirmative] の意味は，疑い，伝聞，推論，感嘆として表れるという。

ただし，Johanson (2003: 283) は，「距離」という概念は非常に曖昧過ぎるため，いかなる説得力ももたない，と述べている。Straughn (2011: 74) 自身が引用している (12) では，遠い昔に起こった出来事にも*-di* が用いられている。

(12) *Kolumb* *1492* *12* *oktyabr-da*[10] *kichkina* *bir* *orol-ga*
Columbus October-LOC small one island-DAT

chiq-ib ***qol-di-ø.***
go.out-CVB.SEQ remain-DI-3
「コロンブスは 1492 年 10 月 12 日に小さいある島に上陸した。」
(Raun 1969: 50)

さらに，4 節以降で示すように，Straughn (2011: 77-82) では，*-(i)b* と他の 2 形式 (*-di*, *-gan*) それぞれとの比較がない。そのため，筆者は，表 1 のような対立があるかどうかについては，再考する余地があると考える。

3.3. 先行研究による記述のまとめと問題提起

本節では前節までの先行研究の記述をまとめ，問題提起を述べる。下記の表 2 に先行研究の記述をまとめる。なお，Johanson (2003) はチュルク諸語全体を対象にしている研究であること，表 2 中の Straughn (2011) の行では確認性のみを取り上げていること[11]に注意されたい。

表2　先行研究のまとめ

	-di	*-gan*	*-(i)b*	備考
Kononov (1960)	定過去時制	過去パーフェクト時制	過去主観時制	なし
Johanson (2003)	直接過去	終結	間接過去	広くチュルク諸語を対象
Straughn (2011)	確認性あり	確認性無標	確認性なし	なし

次に，問題提起を行う。Kononov (1960: 215-222) では，*-di*, *-gan*, *-(i)b* の三つの形式を「過去時制」という側面から記述しているが，これらの形式が文法カテゴリーとしてテンスを表しうるのかという問題については再考する必要がある。Johanson (2003) は広くチュルク諸語を対象とした研究であるため，それぞれの言語においてこれら三つの形式がどのような文法カテゴリーを指すのか，という問

[10] 正しくは，*1492 yil 12 oktyabr* である。
[11] Straughn (2011) では、「確認性」のみならず、「定性」「距離」も含めて*-di*, *-gan*, *-(i)b*について考察しているが、「確認性」が三者の使い分けに最も有効であることが主張されている（詳細は3.2節の表1を参照されたい）。そのため、表2では確認性のみを取り上げている。

題については議論していない。Straughn (2011) では「確認性」「定性」「距離」という側面からの記述を行っているが，Johanson (2003: 283) は「距離」という概念は非常に曖昧過ぎるため，いかなる説得力ももたない，と述べている。そこで，本稿では，これら三つの形式が表す文法カテゴリーについて検討する。

4. 各形式が表す文法カテゴリー

本節の構成は，次のとおりである。4.1 節で *-di* について，4.2 節で *-gan* について，4.3 節で *-(i)b* について，それぞれの表す文法カテゴリーを，テンス・アスペクト・証拠性の順に検討する。

4.1. *-di*

まず，*-di* が表すテンス・アスペクトについて検討する。ハルナザロフ (2010: 348) は，*-di* と *-gan* の差異が表れる例として，下記の (13) を挙げている。

(13) a. *U odam* ***kel-di-ø.***
that person come-DI-3
「あの人は来た」(= (1))

b. *U odam* *allaqachon* ***kel-gan=ø.***
that person already come-GAN=3
「あの人はもう来ている」(=(2); ハルナザロフ 2010: 348)

ハルナザロフ (2010: 348) はこれらの例を挙げながら，「「もう」に当たる allaqachon という語はあるが，単純過去 (語幹＋*-di*) の場合には使えない。」と述べている。つまり，*-di* は出来事が過去に起こったことを端的に表すと言える。

ただし，*-di* が現在あるいは未来の動作を表す場合がある。Laude-Cirtautas (1974: 152) によれば，それは対話の場面に限られると述べ，下記 (14) のような二つの動作に用いられるという: a. 話者が早急に動作の結果を望むあるいは恐れる場合の，即座にあるいは最も近い未来に起こる動作，b. 話者がその動作に強い感情を持つ場合の，現在に起こる動作。

(14) a. *qani,* ***nima*** ***qil-di-ngiz*** *rais, yer ber-a=siz=mi, yo'q=mi*
well what do-DI-2PL chairman land give-NPST=2PL=Q no=Q
"Now, what will you do (did you do), chairman, will you give us the land, or not?"

(Laude-Cirtautas 1974: 153)

b. A secretary tries to prevent unwelcomed visitors from entering her boss's office:
hoy, to'xta-ng men sizlar-ga ***ayt-di-m=ku,*** *mumkin emas=ø.*
INTR stop-IMP.2PL 1SG 2PL-DAT say-DI-1SG=EMPH possible NEG.COP=3
"Hey, stop, I tell (told) you, it is not possible!" (Laude-Cirtautas 1974: 155)

しかし，*-di* の未来・現在を表す用法は周辺的な用法であると言える。なぜならば，Laude-Cirtautas (1974: 152) が述べるように，この解釈には，発話状況と話者の心理に条件（対話の場面，かつ，話者が動作の結果を望むか恐れるか動作に対して強い感情を持つ）が必要であるためである。

次に，証拠性について述べる。ハルナザロフ (2010: 348) は，*-di* は「話者がその事柄の目撃者であることも表す」と述べている。しかし，Straughn (2011: 63-64) は，「見た（直接体験）vs. 聞いた，認識した（非直接体験）」という基準を *-di* vs. *-gan* の区別に採用することは，それらの間の関係を単純化しすぎである，と述べている。その根拠として，下記 (15) と説明を挙げている。

(15) a. *Huddi shu serial o't-gan oy-lar-da Turkiya*
just that serial pass-PTCP.PAST month-PL-LOC turkey

kanal-i-da ham ***ber-il-di-ø,*** *lekin* ***ko'r-ma-di-ø.***
channel-3.POSS-LOC also give-PASS-PAST-3 but see-NEG-DI-3
「まさにそのシリーズは過去数か月トルコチャンネルでも放送された，しかし，（彼はそれを）見なかった。」(Straughn 2011: 64)

b. *Urganch-da ikki marta* ***bor-gan=man.***
Urgench-LOC two time go-GAN=1SG
「私はウルゲンチに二回行ったことがある。」(Straughn 2011: 64)

Straughn (2011: 64) は，上記の例について次のように述べている: a. では *-di* が用いられているが，話者は実際の事態を見たわけではない。一方，b. では *-gan* が用いられているが，b. の事態は話者が直接体験したことである。

さらに，Straughn (2011: 66, 75) は，同じ内容の歴史的事実に*-di* と*-gan* が用いられる例 ((16), (17)) を挙げている。

(16) *Kolumb 1492 12 oktyabr-da kichkina bir orol-ga*
Columbus October-LOC small one island-DAT

chiq-ib ***qol-di-ø.***
go.out-CVB.SEQ remain-DI-3

「コロンブスは 1492 年 10 月 12 日に小さいある島に上陸した。」

(=(12))

(17) *Kolumb* *Amerika-ni* *1492* *yil-da* ***kashf*** ***et-gan=ø.***
Columbus America-ACC year-LOC discover do-GAN=3
「コロンブスはアメリカを 1492 年に発見した。」(Straughn 2011: 66)

つまり，*-di* は必ずしも直接経験を表すものではないと結論付けられる。Kononov (1960: 216)では，*-di* による動作が話者にとって疑いのないことであるという言及があるが (3.1 節 の (4) を参照されたい)，話者にとって疑いのない事態に*-(i)b* が用いられている例 (18) が筆者作成のコーパス [12]から見つかった。

(18) *—Bay—bay*[13], *juda* *shirin* *osh* ***bo'l-ib=di,*** *qo'l-ingiz* *shirin* *ekan=ø*
INTR—RDP very sweet pilaf be-IB=3 hand-2PL.POSS sweet COP.ID=3

deya *maqta-y—maqtay* *osh-ni* *paqqos* *tushir-a*
QT commend-CVB.CNT—RDP pilaf-ACC completely take.down-CVB.CNT

boshla-di-ø Asyur fermer.
start-DI-3 NAME farmer
「『おいおい，とてもおいしそうなピラフだなあ，あなたたちの手がうまそうだ』と称賛しながら，アシュル農夫はピラフをすっかりつかみ始めた。」
(BeshQiz_va_BirYigit: 944)

(18) は，アシュル農夫と彼の農場で実習している女の子が同じテーブルについている場面である。(18) の前に，女の子たちがピラフを食べている描写があり，その様子を見たアシュル農夫の発言が (18) で表されている。アシュル農夫は，この発言の前に，ピラフをおいしそうに食べている女の子たちの様子を見て，このピラフはおいしいはずであると考えたため，*-(i)b* が用いられていると考えられる。

---

[12] このコーパスは，インターネットニュースサイトOzodlik radiosi (http://www.ozodlik.org) からの記事と，Besh qiz va bir yigit『5人の女の子と1人の若者』という小説から成り，それにグロスを付けたものである。
ニュース記事のデータは87本の記事から成る (記事一本当たり，単語数150，文字数1200として計算すると，データ全体では，単語数 約13,050，文字数 約104,400である)。いずれの記事も2014年1月から8月，2015年7月から11月，2016年3月から4月にwebに掲載された。なお，記事の選定には明確な基準はなく，筆者が任意で記事を選んだ。
一方，小説は全48ページで，単語数 約42,000，文字数 約3,060,600 のデータである (1ページあたり，単語数1,500・文字数10,950で計算している)。なお，ニュース記事から抽出した場合は，用例末に当該用例のある記事URLを，小説から抽出した例の場合は，(BeshQiz_va_BirYigit: テキストファイル内行数) という情報をそれぞれ付す。

[13] —は，原典では-(ハイフン) で前後の語がつながれていることを表す。

本節では，*-di* が，テンス・アスペクトの観点からは，過去に起こった事態を表し (13)，証拠性の観点からは，必ずしも直接体験や話者にとって確信度の高い事態に用いられるわけではないこと ((15)~(18)) を示した。したがって，*-di* は，証拠性を表さず，テンス (過去) を表すと結論付ける。

4.2. *-gan*

まず，*-gan* が表しうるテンス・アスペクトについて検討する。4.1 節でも挙げたハルナザロフ (2010: 348) による例と説明を再掲する。

(19) a. *U odam* ***kel-di-ø.***
that person come-DI-3
「あの人は来た」

b. *U odam* <u>*allaqachon*</u> ***kel-gan=ø.***
that person already come-GAN=3
「あの人はもう来ている」(= (13))

ハルナザロフ (2010: 348) はこれらの例を挙げながら，「「もう」に当たる allaqachon という語はあるが，単純過去 (語幹＋*-di*) の場合には使えない。」と述べている。したがって，結果状態を表す場合は，*-gan* が用いられると言える。Ivanov (1958: 129) は，動詞語幹が限界動詞 (ロシア語 приходить「来る」，брать「取る」，открывать「開ける」など) である場合に，*-gan* が結果状態を表す，と述べている。なお，3.1 節の(6) と 4.1 節の (15)b. で，*-gan* が結果状態のみならず，経験も表せることを示した。つまり，*-gan* は現在パーフェクトを表すと言える[14]。

さらに，ハルナザロフ (2010: 348) によれば，*-gan* は「事柄の結果に焦点を当てた形式であり，その事柄を自分で目撃したかどうかが問われない」とされている。この記述は証拠性の観点からも興味深い。しかし，3.1 節で，そもそも *-di* vs. *-gan* の対立は，直接体験 vs. 間接体験の対立でないということを示した。つまり，両者は証拠性という観点では対立していないと言える。なお，*-gan* が間接証拠を表す例は，(21) を参照されたい。

Comrie (1976: 108-110) では，いくつかの言語 (特にトルコ語，ブルガリア語，グルジア語，エストニア語) で，パーフェクトと (間接的な証拠による話者の) 推量とが形式的に一致していたり，ほぼ一致していたりすることについて述べている。

> With the perfect, a past event is related to a present state, in other words the past event is not simply presented per se, but because of its relation to a present state. With the inferential, the past

[14] 過去パーフェクトは、*-gan edi* [COP.PAST] という形式で表される。

> event is again not presented simply per se, rather it is inferred from some less direct result of the action (e.g. a second-hand report, or prima facie evidence, such as the wetness of the road leading to the inference that it has been raining, even when the raining itself has not been directly witnessed). Thus the semantic similarity (not, of course, identity) between perfect and inferential lies in the fact that both categories present an event not in itself, but via its results, and it is this similarity that finds formal expression in languages like Georgian, Bulgarian, and Estonian.
>
> (Comrie 1976: 110)

上記の引用より，パーフェクトと間接的な推量との意味的な類似点は，「過去の出来事が現在の状態に関係づけられている」という点にあると言える。3.2 節で挙げたように，Johanson (2003: 278) も，チュルク諸語に見られる -GAN は二次的に間接性の読みを持つとしている。

したがって，*-gan* は，文法カテゴリーとしてもっぱらテンス・アスペクト (現在パーフェクト) を表すと言える。

4.3. *-(i)b*

この形式は特定のテンス・アスペクト的意味を表さない。ハルナザロフ (2010: 349) は，下記の (20) を挙げている。a. では*-(i)b* が用いられ，一方，b. では*-di* が用いられている。

(20) a. (*lye,*) *Tanaka* ***kel-ib=di.***
INTR NAME come-IB=3
「(あっ，) 田中さんが来た。」(= (3))

b. (*Ana,*) *Tanaka* ***kel-di-ø.***
there NAME come-DI-3
「(ほら，) 田中さんが来た。」(ハルナザロフ 2010: 349)

ハルナザロフ (2010: 349) は，上記の例を挙げながら，「予想外の場合は伝聞過去 (語幹＋-(i)b) を使い，予想内の場合は単純過去 (筆者注: 語幹＋-di) を使う」と述べている。つまり，mirative の読みがされる場合は，*-(i)b* が用いられると言える。上記の (20) は過去の出来事について言及しているが，未来の出来事についても*-(i)b* は言及できる。詳しくは 4.1 節の (18) を参照されたい。

-(i)b は，mirative の読みだけではなく，間接証拠 (伝聞) も表せる。(21) に例を挙げる。これは筆者による作例である。

(21) (*Gazeta-ga* *ko'ra/* *Gazeta-ga* *qaraganda*[15]) *Amerika-dagi*
newspaper-DAT according newspaper-DAT according America-ADJLZ

ishsizlik *daraja-si* *o'tmish-dagi* *eng* *yuqori-si-ni*
unemployment degree-3.POSS past-ADJLZ SUPER height-3.POSS-ACC

qayd ***qil-ib=di/qil-gan=di.***
record do-DI=3/do-GAN=3
「(新聞によれば，) アメリカの失業率が過去最高を記録したそうだ。」

インフォーマントは，文末の動詞を過去形にすると (*qayd qil-di-ø*)，不自然であるが言えると判断した。

したがって，*-(i)b* はもっぱらモダリティ (証拠性) を表すと言える。

5. おわりに

本稿では，過去の出来事を指し示す動詞屈折接尾辞 *-di, -gan, -(i)b* の表しうる文法カテゴリーについて議論した。

まず，2 節で，文法カテゴリーとしての通言語的なテンス・アスペクト・モダリティの定義を参照し，文法カテゴリーをどのように取り扱うか示した。

3 節では，ウズベク語の参照文法における記述 (Kononov 1960) と証拠性の観点による記述 (Johanson 2003, Straughn 2011) を概観し，問題提起を行った。Kononov (1960) の記述を参照する限り，特に *-gan* と *-(i)b* は，文法カテゴリーとして過去時制を指しているとは言いがたい。さらに，Johanson (2003) では，新ウイグル語・ウズベク語・カザフ語・トルクメン語それぞれの言語において，-DI, -GAN, -IBDIR がどのような文法カテゴリーを指すのか，という問題については議論していないこと，Straughn (2011) では主に「確認性」という観点から三者の記述を行っていることを指摘し，これら三つの形式が表す文法カテゴリーについて検討することが必要であると述べた。

4 節では，テンス・アスペクト・モダリティ (証拠性) の観点から，*-di, -gan, -(i)b* をそれぞれ分析することで，それらの形式が表す文法カテゴリーについて議論した。表 3 に，本稿で行った分析・考察をまとめる。表 3 の二段目の行に本稿での分析・考察をまとめ，三段目以下の行に先行研究による記述をまとめる。4.1 節では，*-di* が，テンス・アスペクトの観点からは，過去に起こった事態を端的に表し，

---

[15] *ko'ra*は，動詞*ko'r-*「見る (see)」由来の後置詞である (*ko'ra* < *ko'r-a* [see-CVB.SEQ])。*ko'ra*は与格-*ga*を要求する。他方，*qaraganda*は，動詞*qara-*「見る (look)」由来の後置詞である (*qaraganda* < *qara-gan-da* [look-PTCP.PAST-LOC])。*qaraganda*は与格-*ga*を要求する。

なお，筆者のコーパスからは，*A-ga ko'ra/qaraganda*「Aによれば」が*-di, -gan, -(i)b*と共起している例は見つからなかった。

証拠性の観点からは，必ずしも直接体験を表すわけではないことを示した。したがって，*-di* は過去（テンス）を表すと結論付けた。4.2 節では，*-gan* が，テンス・アスペクトの観点からは，現在パーフェクトを表し，証拠性の観点からは，必ずしも間接体験を表すわけではないことを示した。したがって，*-gan* は，現在パーフェクト（テンス・アスペクト）を表すと結論付けた。4.3 節では，*-(i)b* が，特定のテンス・アスペクト的意味を持っておらず，証拠性の観点からは，間接証拠も mirative も表しうることを示した。したがって，*-(i)b* は証拠性（モダリティ）を表すと結論付けた。

表3　本稿での分析・考察と先行研究による記述との比較

	-di	*-gan*	*-(i)b*
本稿	過去 (テンス)	現在パーフェクト (テンス・アスペクト)	証拠性 (モダリティ)
Kononov (1960)	定過去時制	過去パーフェクト時制	過去主観時制
Johanson (2003)	直接過去	終結	間接過去
Straughn (2011)	確認性あり	確認性無標	確認性なし

略語一覧

-		接辞境界	NEG	(negative)	否定
=		接語境界	NPST	(non-past)	非過去
1, 2, 3		1,2,3人称	PASS	(passive)	受身
ABL	(ablative)	奪格	PAST	(past)	過去
ACC	(accusative)	対格	PL	(plural)	複数
ADJLZ	(adjectivizer)	形容詞化	POSS	(possessive)	所有
CNT	(continue)	継続	PTCP	(participle)	形動詞
COP	(copula)	コピュラ	Q	(question marker)	疑問標識
CVB	(converb)	副動詞	QT	(quotation)	引用
DAT	(dative)	与格	RDP	(reduplication)	重複
EMPH	(emphatic)	強調	RECP	(reciprocal)	相互
ID	(indirect evidential)	間接証拠	SEQ	(sequential)	継起
INTR	(interjection)	感嘆詞	SG	(singular)	単数
LOC	(locative)	処格	SUPER	(superlative)	最上級
NAME	(proper name)	固有名詞	VN	(verbal noun)	動名詞

参　考　文　献

Aikhenvald, Alexandra Y.. 2003. "Evidentiality in typological perspective". In Alexandra Y. Aikhenvald and Robert M. W. Dixon (eds.). *Studies in Evidentiality*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins. pp.1–32.

Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. London: Cambridge University Press.

————. 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.

Delancey, Scott. 1997. "Mirativity: The Grammatical Marking of Unexpected Information". *Linguistic Typology*: 1 (1). pp.33–52.

ハルナザロフ・マルムジョン. 2010. 「ウズベク語 (データ:「アスペクト」, テーマ企画：特集 「アスペクト」)」. 『語学研究所論集』 15. pp.348–354.

Ibrahim, Ablahat. 1995. Meaning and usage of compound verbs in modern Uighur and Uzbek. Ph.D. dissertation, University of Washington.

Ivanov, Sergej N.. 1958. "Prošedšee perfektivenoe vremja v sovremennom uzbekskom jazyke [現代ウズベク語における過去パーフェクティブ時制]". *Leningradskij ordena gosudarstvennyj universitet im. A. A. Ždanova. Pamyati akademika Ignatiya Yulianovicha Kračkovskogo: sbornik statej.* Leningrad: Izdatel'stvo Leningradskogo Universiteta. pp.125–138. [in Russian]

Johanson, Lars. 2000. "Turkic indirectives". In Lars Johanson and Bo Utas (eds.). *Evidentials. Turkic, Iranian and neighbouring languages*. Berlin: Mouton de Gruyter. pp.61–87.

————. 2003. "Evidentiality in Turkic". In Alexandra Y. Aikhenvald and Robert M. W. Dixon (eds.). *Studies in Evidentiality*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins. pp.273–290.

Kononov, Andrej N.. 1960. *Grammatika sovremennogo uzbekskogo literaturnogo jazyka* [現代標準ウズベク語文法]. Moskva, Leningrad: Izdatel'stovo akademii nauk SSSR. [in Russian]

Laude-Cirtautas, Ilse. 1974. "The Past Tense in Kazakh and Uzbek As A Means of Emphasizing Present and Future Actions". *Central Asiatic Journal*: 18 (3). pp.149–158.

Lazard, Gilbert. 1999. "Mirativity, Evidentiality, Mediativity, or Other?" *Linguistic Typology*: 3 (1). pp.91–110.

Palmer, Frank R.. 2001. *Mood and Modality. 2nd ed.* Cambridge: Cambridge University Press.

Raun, Alo. 1969. *Basic course in Uzbek.* Bloomington: Indiana University.

Straughn, Christopher A.. 2011. Evidentiality In Uzbek and Kazakh. Ph.D. dissertation, The University of Chicago.

チュルク語文法の諸相—音韻・形態統語・意味—
Aspects of Turkic Languages: Phonology, Morphosyntax and Semantics

2022 年 3 月 25 日発行

編者　佐藤久美子・児倉徳和
発行　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
　　東京都府中市朝日町 3-11-1
印刷　日本ルート印刷出版株式会社
　　東京都江東区新大橋 1-5-4　永谷ビル

本書は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」および AA 研共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相—音韻・形態統語・意味の統合的研究—」の成果の一部として刊行されたものである。

©2022　The authors of the articles

ISBN 978-4-86337-381-5